

4. 農村女性を対象とした開発の取り組みとその役割

—インドビハール州ブッダガヤの事例—

小澤 さくら

人間文化創成科学研究科ジェンダー社会科学専攻開発・ジェンダー論コース1年

【調査期間】2012年2月18日～3月14日

【調査目的】

本調査の目的は、インドビハール州ガヤ県ブッダガヤのダリットカーストの多く住む農村において、女性を対象とした開発の取り組みとその役割を調査することである。カースト、ジェンダー、など様々な背景が複雑に住民同士の関係を構築する村の中で、女性を対象に活動するNGOや政府プロジェクトはどのような意識と目的のもとに草の根レベルで活動しているのか、社会的に周辺化されやすいダリット女性の平和的で安定的な生活の実現に向けてそれらの取り組みが果たしている役割はいかなるものであるか、という点に注目する。インドでは政府による開発スキームや、無数に存在するNGO・社会運動家など様々なレベルのアクターによって開発の取り組みが行われる。本調査は、その中でもある地域に焦点を当て草の根レベルの活動を調査することで、活動の多様性や社会への影響力を考察するための一つのステップとして位置付けられる。

開発の領域において貧困の女性化は広く認識され、開発政策や現場においてジェンダーを配慮することの重要性については多くの議論がなされている。しかし、現在でもなお、インドでの女性の識字率の低さや、人口の性比が示す女性人口の少なさなどジェンダー格差はしばしば示される。またレイプや性的虐待、誘拐などの女性が被害となる犯罪も数多く報告されている¹⁵。今回の調査地域であるインドビハール州はインドの他州と比較しても経済的に後進的な地域として注目される地域である。また経済面にとどまらず、識字率やジェンダー格差など人間開発の側面でも深刻だと報告される¹⁶。例えば、ビハール州の識字率(2011年)63.82%はインド全体の識字率74.04%を大きく下回り、全35州の中の最下位に位置する¹⁷。そしてその中でも農村地域女性の識字率は50.82%と低く、人口の88.7%が農村地域に住むビハール州においても農村地域女性は周辺化さ

¹⁵ Thakur, Sadhana(2012). *Women Empowerment in Rural India*. New Delhi: Abhijeet Publications.

¹⁶ 湊一樹(2011)「低開発の政治経済学—最貧州ビハールの事例—」『アジア研ワールド・トレンド』(187)アジア経済研究所、pp32-35

¹⁷ Government of India(2011). *Census of India 2011 Provisional Population Totals*

れ社会的弱者に陥りやすい存在であると考え。さらには 2001 年のセンサスデータによれば、ビハール州の指定カーストの識字率は 28.5%であり、指定カースト女性の識字率に限っては 15.6%と極めて低い値となっている¹⁸。このことから、本調査では女性やダリットといった社会的に弱い立場にある人々は貧困地域の中でも特に周辺化されており、ダリットの女性というのは最も生活が脅かされやすい存在であると仮定する。そのようなダリット女性の不利な状況や生活を脅かす原因を解消していくことは必須であり、村での草の根レベルの開発の取り組みが、平和的で安定的な生活を実現することに寄与することが期待されるとともに、その活動の現状を調査することは今後の社会の発展と平和的な生活の可能性を探ることにつながると考える。

【調査概要】

1. 調査方法

本調査では 2 月 18 日～2 月 24 日までを首都デリーでの文書収集、NGO 等への訪問を行い、残りの日数ではインドビハール州ガヤ県(district)ブッダガヤ地区(block)においてフィールド参与観察、インタビュー、文書収集を行った。フィールドでは活動規模や組織背景が大きく異なりながらも、同じ地域で活動する 3 つの団体を主に調査した。今回は特に村の女性を活動に取り込む NGO のスタッフや組織としての意識・取り組みに重点をあてたため、参与観察とスタッフへの聞き取りがメインとなった。英語、ヒンディー語に加え、この地域の農村で母語として使われるマガディー語を話す男女 1 名ずつを通訳とし、両者もしくは一方を介して調査を進めた。英語を話すスタッフには筆者が直接聞き取りを行った。

2. 関係組織概要

今回筆者の主要な受け入れ先となった Jeevan Deep(人生の灯火) という NGO の代表者の男性は、自身もガヤ県出身のダリットカーストという背景を持つ。この団体の主な活動目的は貧困農民の中でも特にダリットの住む村を対象とした教育支援、女兒向けの裁縫教室、その他に簡単な出張医療所を開いている。1995 年より 16 年間ブッダガヤでの初等レベルの教育支援を行っており、地域の事情や NGO の活動などに精通していることから、通訳と解説を依頼した。しかし、本報告では女性向け支援に焦点をあてて報告するため、活動内容自体は大きくはふれない。

次に Nari Jaguran Munch という女性 NGO である。1 人の修道女が村の女性に声をかけ、賛同した 4 名の女性から始まった。1995 年から活動を続け、現在では 14 名のスタッフが中心となって活動しているが、創設者である女性はブッダガヤに常駐しているわけではなく、活動資金源や対外交渉役として重要な存在となっているようであった。主な活動は村の女性の自助グループ(Self Help Group: 以下 SHG)によるマイクロクレジ

¹⁸ Government of India(2007). Bihar Data highlights: The Scheduled Castes

ットと、女兒への教育支援である。本報告で主に報告する SHG の活動としては、ブッダガヤとその周辺の 58 の村で活動し、155 のグループと 1650 人の女性メンバーを持つ。

3 つ目はビハール州政府によるプロジェクトの実施機関である「ビハール農村生計プロジェクト(Bihar Rural Livelihood Project: BRLP)」(またの名を Jeevika、本稿では以下 Jeevika と呼ぶ。)の活動である。このプロジェクトはビハール州政府が世界銀行の支援を受けて 2007 年から 5 年間の計画として始めたものであり、Jeevika はこのプロジェクトのために組織された。5 年間で総計 7300 万ドル(うち 6300 万ドルは世界銀行からの資金)の予算を見込んだ巨大プロジェクトである。その目的はビハール州の貧困農民の社会的、経済的エンパワーメントを促し、生活を向上させることである¹⁹。中心的な活動となっているのは SHG によるマイクロファイナンスであるが、SHG の活動を通じたマネジメント、管理能力向上や、リーダーの育成などを行っている。筆者が今回の調査期間中に実際に見る事が出来たのはマイクロファイナンスの取り組みである。

3. ビハール州ガヤ県ブッダガヤ概要

インド北東部に位置するビハール州は面積 9 万 4163 平方キロメートル、人口 1 億 380 万人を有し、インドで 3 番目に人口規模の大きい州である。また州南部を中心に石炭や鉄鉱石、銅などの地下資源に恵まれた土地である²⁰。一方でビハール州はインド内においても特に経済的に貧しい地域であることで知られている。ビハール州の一人当たりの経済水準(準州内生産)は経済的な先進州のひとつであるハリヤーナ州の 4 分の 1 であり、インド全体の一人当たりの経済水準と比較しても 40%程度にすぎない²¹。また経済面に限らず、低識字率などの社会的な後進性もしばしば注目される。

ガヤ県は、ビハール州にある 38 の県のうちの一つであり人口 438 万人(2011 年)と、ビハール州の中で 5 番目に人口の多い県である。ガヤ空港があることから主要な県の一つであることが伺える。2001 年のデータでは人口の 82%が農村地域の住民であり、同州データ同様に人口の大部分が農村地域に住んでいることがわかる。また、ガヤ県の特徴として、指定カースト(Scheduled Caste: 以下 SC)、つまりダリットカーストの人口の割合が 29.6%と高いことがあげられる。インド全土の平均やビハール州の平均はいずれも 16%前後であることから考えても、ガヤ県は SC が比較的多く住んでいる地域であると考えられる。

ブッダガヤはこのガヤ県の中心からおよそ 11 キロメートルの場所に位置する。仏陀が悟りを開いた土地としても有名であり、仏教徒や仏教僧が世界中から訪れる地域であ

¹⁹ Jeevika HP-<http://brlp.in/objective.php>(2012/03/15 参照)

²⁰ 大橋正明(2001)『「不可触民」と教育 インド・ガンディー主義の農地改革とブイヤーンの人々』明石書店

²¹ 湊、前掲論文、p32

る。このブッダガヤの人口約 18 万 6000 人(2001 年)のうち約 83%が農村地域に住み、また人口の約 38%が SC である²²。今回の調査対象は、このブッダガヤからおよそ 20 キロメートル圏内に位置する農村であり、どの村にもダリットカーストが住んでいる。そして、彼らの大半は農村に住まいながらも土地を所有しておらず、近隣に住む地主の土地で農業労働者として働くことで生計をたてている。また、季節によっては都市に出て建設労働者やレンガ造り、リキシャーの運転手などをして働くことで日当を稼いでいる。

【調査結果】

1. Jeevika による活動—Arjun Bigha 村の例—

・ Arjun Bigha 村について

ここではまず、Jeevika の組織する SHG において参与観察と聞き取りから得られた仕組みを 1 つの村の例から説明する。

ブッダガヤの街からおよそ 20km の場所に位置する Arjun Bigha 村は、人口 506 人(2001 年)うち 278 人が SC に属している。半数以上を占める SC のうちの大半はブイヤーンというカーストに属し、多くの世帯で土地は所有していない。また同じ村の中にはヤダブという、より高位カーストの住民もいる。他の村のヤダブの中には大地主として土地を所有し、労働者を雇うほどの世帯もあるというが、この村ではいくらかの土地を所有しつつも特出して裕福な世帯はみられないようであった。しかし、村の中でもブイヤーンとヤダブの住む場所は 1 本の道によって隔てられているなど村の中でも住み分けが成されている。家屋の作りに関してもブイヤーンの住む区画が藁と土による家が多いに対し、レンガ造りの家が見られるなど裕福度の度合いにも多少差があるようであった。村人への聞き取りによると、全ての世帯が鶏を所持しており、牛・ヤギを飼育しているのは約半数だという。主に男性が 9 時から 17 時まで近隣の農地で農業労働者として働き、1 人 5kg の米を報酬として得る。世帯によっては女性も同様に農業労働者として働きにでている。

・ Jeevika の SHG 活動

10 人～12 人の女性がひとつのグループを作り、グループメンバーによって選出された代表 3 名の連名によりグループの銀行のアカウントを作成する。この村には 12 のグループがあり、それぞれのグループが毎週ミーティングを開く。女性たちは毎週のミーティングで 1 人 10Rs(日本円約 18 円)ずつ、グループのアカウントに貯める額を支払い、月に 1 回グループの代表者が街に出て銀行の窓口に行く。アカウントからお金を借りたいときにはミーティングの際に申し出、額や返済計画などを決めた上でグループから貸出される。返済額には 2%の利子が上乗せされる。なおこのミーティングの際には、読

²² Census of India 2001

み書きのできるスタッフが帳簿の記入、ミーティングの記録をつける。これらのスタッフは Jeevika の有給スタッフではあるが、メンバーと同じ村から選出されることになっている。多くのメンバーは文字の読み書きはできないようで、ミーティング出席のサインも指印によって済ませる。これに加え、Jeevika では1つの村に1つの Village Organization(VO)という組織を持つ。全グループの代表3名が月に1度ミーティングを開いており、このVOはJeevikaの大本のプロジェクトからの技術支援や資金を受け取る窓口となっている。例えば1つのVOは食糧プログラムのために20万ルピーの予算があり、SHGのグループアカウントとは別に米の支援が受けられる。VOではその予算の配分やどこでいくらの米を買うかというような細かい話合いが成されるという。

参加者の女性の主な目的はこのアカウントから資金によって家族の病気など緊急時に備えること、また豚や牛などの家畜の購入することであった。参加以前は、急な出費の際には地主から借金をせざるを得ず、10%の利子を支払う必要があった。その時から比較し生活が安定的に送れるようになっただけでなく、家畜購入を可能とすることで今後の収入源を確保することにつながっている。

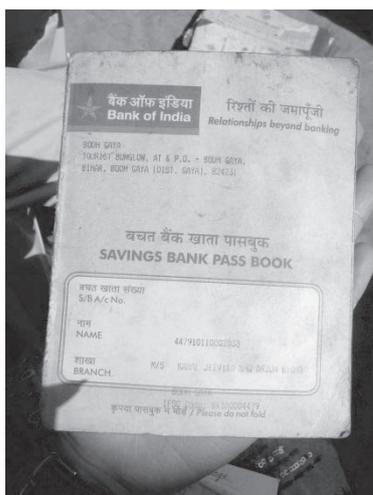


写真1：バンクアカウント



写真2：ミーティングの様子

2. Nari Jagran Munch の活動—Dhariya Bigha 村の例—

・ Dhariya Bigha 村について

Dhariya Bigha 村は Nari Jagran Munch の活動地の1つであり、10年前からSHGを組織している。およそ200世帯が住むこの村ではラビダースとパーシーという2種類のダリットカーストが住んでおり、他に高位カーストの住民もいる。だがやはり、村の中で住む区画は区別され直接関わることは非常に少ないという。多くの世帯では土地を所有せず、主な職業は農業労働者とリキシャー運転手である。前者の場合は1日の労働に対し3.5kgの米、後者の場合100~150ルピー（うち20ルピーはリキシャーのレン

タル代にあてる)の収入を得ている。

・ Nari Jagran Munch の SHG

1 グループ 10~15 人で 9 つの SHG が組織されている。SHG での活動は Jeevika と同様マイクロファイナンスの取り組みが主な活動となっているが、こちらでは月に 1 度ミーティングを開き、30~50 ルピーずつ貯金をしていく。アカウントからお金を借りたいメンバーが現れた時には、特別なミーティングが開かれ、貸出し額や返済について議論される。SHG のメンバーでなくても緊急時にはお金を借りることが可能であり、利子はメンバーに対しては毎月 3%、非メンバーに対しては 5%が要求される。

この村にはダリットカースト以外に他に高位カーストの世帯も住んでいると述べたが、Nari Jagran Munch の方針により、SHG はダリットの女性のみを対象としている。その理由としては以下 2 点が挙げられた。第一に Nari Jagran Munch は女性でかつダリットカーストに属する人が最も社会的な弱者であるにとらえていること、第 2 にたとえ経済的に貧しくても高位カーストの女性は身分が高いという意識が抜けず、活動に支障をきたすと考えている点である。こういった意識から、活動の基本方針として対象をダリットの女性に限っている。

3. 両方の SHG に属する女性—Tirkha 村の例—

人口 625 人(2001 年)うち約 40%がダリットカーストである Tirkha 村には Nari Jagran Munch と Jeevika 両方の SHG が活動している。その両方に属している女性に聞き取りを行った。6 年前から この女性は夫と 4 人の娘、1 人の息子の 6 人家族で、2 人の娘は既に結婚し家を建てている。夫は午前 8 時~午後 5 時まで地主の土地で農業労働をするか、ブッダガヤの街で日雇いの労働仕事をしている。

彼女は 6 年前から Nari Jagran Munch の SHG で活動している。つい 2 カ月前からこの村でも Jeevika が活動を始めたことにより、Jeevika の SHG にも所属している。Nari Jagran Munch の SHG には月 1 回 30 ルピー、Jeevika の SHG には毎週 10 ルピーずつそれぞれのグループアカウントに貯金をしており、彼女のグループでは全員が両方の SHG に属しているようだ。これまでには 4 年前に Nari Jagran Munch の SHG から 2500 ルピーを借り、豚とヤギを購入した。その家畜を育て売ることによって得た資金は、グループへの返済と娘の結婚持参金につかわれたという。それ以後、アカウントから資金を借りたことはないが、新たに Jeevika の SHG にも参加した目的は娘の結婚持参金に備えたいというのが一番の目的であると言っていた。

【考察】

1. 「女性が参加する理由—緊急時の備え」

2 種類の SHG の取り組みから、村の女性にとっての活動の役割を考察する。まず、

今回の調査対象村の説明からもわかるように、今回調査をした地域では多くのダリットが自らの農地を所有せず、高位カーストの農地で農業労働者として働くか、街に出て労働をすることで日当を得ていた。この収入の不安定さと、急な出費への対応の困難さがこの地域のダリットカーストを貧困状況に陥らせている理由であることが考えられる。それに対し、女性が SHG の活動を継続し、家族の緊急時や急な出費にそなえることで貧困状況に陥ることを防ぐことを可能としている。また家畜購入など新たな収入源のチャンスを作り出すことで、生活を向上させる取り組みに繋がっていることも伺える。

また、女性たちは SHG に参加することで、家族以外の他人と話す機会を増やしている。これにより、他人と話すことへの恥じらいを必要以上に感じる事が無くなり、社会とのつながりや交渉能力を強めていると考えられる。

2. 「2つの SHG を使い分ける女性—平和で安定的な生活への備え」

本調査では、同じような SHG によるマイクロファイナンスの取り組みを持ちながらも、その活動規模や組織の性質が全く異なる 2つの組織が、同じ村ないし近くの村で活動しているという現状を聞き取ることができた。この様に複数の活動が存在することは貧困農村の女性にとってどのような影響があるのだろうか。

まず第一に、その状況は女性にとって支援の使い分けを可能にしていた。今回調査したいくつかの村では、1つの村の中で 2種類の組織が SHG を組織しており、そのような村の中では多くの女性は両方のグループに所属していると答えていた²³。その理由を聞くと、両組織ともに主な活動はマイクロファイナンスでありながらも、少しずつ異なる活動と支援方法をとっており、必要な時に必要な方の支援を利用するという声があがっていた。もちろん両者を併用するという事は、それだけミーティングの時間や定期的に預金する額などの負担も増えることになる。しかし、それでもなお両者の併用を選択する女性が多く見られたことから、必要な時により多くの支援をうけられるよう備えることで安定した生活を手に入れることに取り組んでいるとも考えられる。

3. 「異なる目的、組織間の葛藤—最も支援を必要とするのは誰か」

何度も述べるように、本調査ではどちらも SHG を主な活動とするが全く背景の異なる 2つの団体が見られた。Jeevika は世界銀行からの資金がついた政府主導プロジェクトである。今回調査した村ではこのプロジェクトが始まってからまだ 1年~2年と短い年月であったが、スタッフによって村の活動がよくケアされていることや、それだけでなく VO というシステムを通してその資金や技術の援助がそれぞれのグループ、ないし

²³ この点に関して、Jeevika のスタッフに対する聞き取りによると、他の SHG に既に参加している女性の参加は原則認めない方針であった。しかしながら、10年以上活動を続ける Nari Jagran Munch に対し、Jeevika の活動は日が浅く信頼度や従来の活動との関係を考慮して事実上かけもちが認められているようである。

メンバー個人へとスムーズに分配されていることが女性を活動に引きつけていると考えられる。一方で、プロジェクト名の「Bihar Rural Livelihood Project」からもわかるように、このプロジェクトは貧困農民の生活改善が第一の目的であり、女性やカーストによる社会的な弱者の貧困削減やエンパワーメントをターゲットにしている訳ではない。この点に関して Nari Jagran Munch はより強くジェンダー・カーストによる経済的・社会的格差を意識しており、最も周辺化された人への活動が必要であると訴える。すでに10年以上同じ場所で SHG の活動を進めてきたが、2年ほど前から Jeevika のプログラムが同じ村でも活動を始めた。女性の中には掛け持ちで2つのグループに所属する者や、それまでのグループを抜けて Jeevika の新しいグループに移動する者も表れたことには、少なからずよく思っていないスタッフもいるようであった。

この様に目的意識や組織の背景の異なる主体が同時に活動することで、その組織間では意見の相違や葛藤も存在するようである。また Jeevika は現在は大きな予算を背景に着々と活動範囲を広げているが、そのプロジェクトの終了後は今後どのように引き継がれていくのか、もしくは無くなってしまうのか、継続性の点で疑問が残る。

【今後の研究への展望】

今回の調査では、初めて調査として現地に足を運ぶことで書籍やインターネットでは得ることができないローカルな現状を得られる重要な機会となった。しかし一方で筆者の調査前の認識と現地状況の大きなギャップにも直面し、また言語や調査スキル等の点でも改めて困難さを感じることは多々あった。今後は今回得られた情報から研究を修正するとともに、得られた情報の分析を進めたい。特に、本調査でも1つのテーマになっているようにカーストとジェンダーはインド社会の貧困、抑圧を考える上で欠かすことのできない要素であり、研究を進める上での鍵となると考える。

【本制度へのアドバイス・要望】

本制度は海外への調査を希望していても、経済的に余裕のない学生にとって非常に難しい機会であり、今後も少しでも多くの学生が活用していけることを望む。そのためには、本制度自体の告知、学生への周知をより効果的にされることが必要だと考える。